



平和と和解を築く人 宣教女シスター マリア・トロンカッティ

シート 8

交わりの宣教女：

シスター マリア・トロンカッティの教会的な側面

シスター マリア・トロンカッティの歩みにおいて、私たちは日々の生活の中で生きられる「教会への所属意識」の美しさを見出すことができます。キリストの神秘体の生きた一員として、彼女はその生涯をもって、あらゆる個人的な才能が共同体を築き上げるための賜物であることを示しました。

彼女の卓越した協力の力、奉仕の精神、そしてまったき献身は、教会において誰一人として意味のない存在はなく、すべての人が必要とされているという深い自覚を物語っています。私たちは、彼女の歩みをそのまま真似るように招かれているのではなく、受けた召命に忠実に生きる彼女の姿勢に触発されながら、神の計画における自分自身の唯一の場所を認め、惜しみなく教会の使命への自分なりの貢献を生きるよう招かれているのです。



神の言葉

「ちょうど、体は一つでも多くの部分があり、体のすべての部分は多くても、一つの体であるように、キリストの場合も同様です。ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、わたしたちは皆、一つの霊によって一つの体に洗礼を受け、皆、同じ霊を飲ませてもらったのです。体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。.....ところで、あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。神は教会の中で、人をそれぞれに立てられました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、その次に奇跡を行う者、次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、指導する者、異言を語る者です。皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。皆が奇跡を行う者でしょうか。皆が病気をいやす賜物を持っているでしょうか。皆が異言を語るでしょうか。皆がそれを解き明かすでしょうか。あなたがたは、より大いなる賜物を熱心に求めなさい。そこで、わたしはあなたがたに最もすぐれた道を示します。」（コリントの信徒への手紙一 12 章 12-31 節）」



Video: 「ネストル・モンテスデオカ・ベセラ司教(サレジオ会員)へのインタビュー」

https://youtu.be/B5jmee5wc_w?list=PLukchW4FMtfYjg3qr98TfhGoHN5j4AZIX



Sr. マリア・トロンカッティの手紙から

総長マードレ ルイーザ・ヴァスケッティへの手紙

以下は、シスター マリア・トロンカッティが 1927 年に雑誌「ジュヴェントウ・ミッシヨナリア(宣教する若者)」に発表した3通目の手紙で、署名入りで総長であるマードレに宛てられたものです。

この手紙からは、彼女が修道会の姉妹たちの祈りをいかに大切にしていたかがうかがえます。彼女にとって教会とは、自分一人のものではなく、祈りを共にする人々の共同体でした。また、手紙の中



には、司祭職に対する深い敬意と、秘跡を通して人々に仕える司祭の務めに対する深い思いが表れており、それは必ずしも宣教地では十分に満たされていたわけではありませんでした。

総長マードレへの手紙より

[マカス、1927年]

ああ、「宣教師」という言葉は、心の中にどこか詩的な響きを呼び覚まし、使徒職と自己奉獻の熱い夢のときに魂を魅了して高揚させます。けれども実際には、こう叫びたくなる強い衝動を感じるのです——「祈ってください、祈ってください、どうか力が尽きてしまいませんように」と。精神的な戦いも物質的な困難もあまりに多く、しばしば自然的な弱さが反発し、落胆が私たちを打ち砕こうとします。数週間、あるいは数か月にわたり、この哀れな先住民の人々の間で働き、犠牲を払っても、主や永遠の命についてのほんの小さな考えさえ伝えることができないときに。

しかし私たちは、愛する姉妹たちや、祈ってくださる善意の人々からいただく霊的な助けの効果を感じています。そして主は、時に私たちを取り囲む嵐の雲の中にあっても、太陽の光を欠かすことはなさいません。大きな犠牲の実りとして、私たちは7人の小さなキヴァリ族の子どもたちを迎えることができました。神が望まれるなら、間もなく到着されるコミン司教様による訪問の折に、聖なる洗礼を受けて新たに生まれる喜びを味わうことができるでしょう。そして、そのとき私たちの視察担当の目上も共に来てくださいます。彼女は、私たちにとって慰めの天使なのです。(…)

また、私たちにとって非常に辛いことは、ここ宣教地で唯一の司祭、善きドウローニ神父様が重い病にかかったことでした。どうぞお察しく下さい、この森の孤独の中で、医者も司祭もない状況で長い日々を過ごさねばならなかった私たちの苦悩を。私はマカスから八日の道のりにあるメンデスの宣教師たちに知らせを送りました。その間、どれほどの信頼をもって私たちのマードレ マザレロを呼び求めたことでしょう。善良な宣教師を死から救い、再び健康な姿で私たちに戻してくださいと。ついにメンデスから司祭が到着し、病人は少しずつ回復し始めました。すでに2か月も床に伏していますが、今は快復期にあります。ただし、極度の衰弱のため、まだ聖なる務めに従事することはできません²。

私たち自身の健康もあまり良いとはいえません。というのも、私たちの住むみすぼらしい小屋は非常に湿気が多く、この地方の気候にまだ慣れていないため、その影響を強く受けているのです。

ここには一人のご婦人³が暮らしており、この地の白人キリスト者の間で約28年間、ただ一人で信仰を守り続けてきました。その間、一人の司祭も訪れることはありませんでした。まことに英雄的な人で、彼女のおかげでここに住む文明人たちの間に、今なおわずかながらも信仰と信心が残っているのです。この聖なる女性は、私たちにとって真の助けであり、その熱意に負けないようにと奮い立たせてくれる存在です。

私たちには本当に人手の増員が必要です。仕事は多く、しかも増え続けています。私たちの家はすべての授業を抱えています。ここでは病人や幼児を受け入れています。ここには学校、オラトリオ、作業場、そして主が行わせてくださるあらゆる善いことがあります。私たち各々が4人分の働きをしなければなりません。主が多くの人々の寛大な宣教の召命を呼び覚ましてくださいますように。なぜなら、畑は広いのに働き手が少ないからです。

敬具

最も従順に、最も愛情を込めて
シスター マリア・トロンカッティ
サレジアン・シスターズ



脚注

- ¹ これは、1927年2月および3月に行われる予定のドメニコ・コミン司教とシスター カロリーナ・ミオレッティの訪問を指している。
- ² 参照: COLLINO, *La grazia di un sì*, 154-156頁: 「ドゥローニ神父に迫る死の影」
- ³ メルセデス・ナバレッテ・ガジェゴス (1892-1942) は、ヒヒニオ・ナバレッテとメルセデス・ガジェゴスの娘で、名声と経済的な余裕のある家族に生まれ、リオバンバにて誕生。23歳のときに両親を亡くし、兄弟たちの助けを得て教師資格を取得し、マクスで子どもたちに教えていた。サレジアン・シスターズが到着した後は彼女たちに協力し、さまざまな活動を支えた。1930年には、シュアール族と入植者のための初の共学学校を設立し、コミン司教によって「サン・ドメニコ・デ・グスマン」として開校。今日、その学校は「メルセデス・ナバレッテ学校」と呼ばれている。この模範的な女性の教育への貢献は、当時から現在も政府から高く評価されている。



『Sr. マリア・トロンカッティの伝記』からのひとつの証言

ヴィーニャ神父は、何年にもわたりマクスで院長と主任司祭を務めました。入植してきた白人たちの間で得られた司牧の成果の大部分は、シスター トロンカッティのおかげであると断言してはばかりません。若者たちでさえ彼女に心を打ち明けていました。

とりわけ神父が感銘を受けたのは、彼女が白人であれシュアール(キヴァリ)族であれ、若い女性にも年配の女性にも行っていた教育的な関わり方でした。その方法は、譲ることのできない原則を守りつつも、それぞれの個性や環境に配慮するものであり、学問的研究から得られたというよりも、深く福音に根ざした人間性から生み出された直観と知恵に基づいていました。

ヴィーニャ神父の証言(『要約集』463): 「実を言えば、これらのカリスマを私はシスター トロンカッティだけでなく、当時の多くの宣教師会員たちの中にも見いだしていました。しかし、私にとってシスター トロンカッティは、こうした特別な資質やカリスマを最も典型的に体現する人でした。そして決して忘れてはならないのは、彼女が義務の遂行において弱腰になることはなく、むしろ自分の共同体の仲間に対しても毅然としていたということです。

キヴァリ族の少女たちのための寄宿施設が始まり、必要な柔軟性を備えつつ、独自の方針を打ち出すことが求められたとき、私は彼女や他の素晴らしい宣教師会員たちとともに、伝統的な法律や何千年にも及ぶ習慣に根ざした規律や教育の問題をどう解決すべきか、真剣に話し合いました。私たちの教育的取り組みを通して、キヴァリ族の女性たちは尊厳と社会的地位を獲得し、男性と同じ立場に立つようになりました。しかし、少女たちがこの変化に気づくと、その立場を濫用しようとする誘惑にかられることもありました。半ば原始的な生活習慣が、新しい生活様式や新しい要求とぶつかると、しばしば動揺や混乱、危機が生じ、伝染的な過ちを犯すこともありました。

そうしたとき、私の『シスターたち』は、人間的な常識とバランス感覚で対応し、ときには思い切った手段に訴えることもありました。過ちが公然となり、重大で、容易に広がる恐れがある場合、シスター トロンカッティは冷静で真剣な判断のうえで、キヴァリ族の間で行われていた方法を採用する決断をしました。それは、すべての少女たちを集めて輪になって座らせ、その中心に過ちを犯した子を立たせ、公然と処罰を与えるというものです。

ほぼ50年を経た今なお、あの寄宿舎での教育方法を思い起こすとき、その目的が彼女たちを人生と結婚生活における責任を担う者へと育て上げることにあったことを、驚きをもって思い出します。私は23年にわたり、これらのシスターたちと共に生活しましたが、今こうして数十年を経た今、論理的に結論づけることができるのは——神が彼女たちのうちに、そして彼女たちと共に働いておられた、ということです。」

(マリア・コツリーノ『すべてを捧げた「はい」の恵み』エツレディーチ社、2012年、161-162頁)



振り返りのために

シスター マリア・トロンカッティの生涯は、私たちに「教会への所属」と「共通の使命への貢献」について深く問いかけています。

*私は、自分の居場所を世界の中、教会の中に見いだしているでしょうか。

*シスター マリア・トロンカッティのように、教会に存在するさまざまなカリスマや召命を大切にしながら、他者と協力して使命に携わることができているでしょうか。

*私の生活は、たとえ最も小さな日常のことにおいても、神の国の成長に寄与しているという自覚を、どのように深めていけるでしょうか。

*今週、私はもう誰かに「あなたは私にとって大切な存在です」と伝えたいでしょうか。あるいは、これから伝えてみてもよいのではないのでしょうか。

ある人たちは、自分がどれほど大切な存在であるかを知りません。

ある人たちは、ただその姿を見るだけで、どれほど周囲を慰めているかを知りません。

ある人たちは、そのやさしい笑顔がどれほど力を持っているかを知りません。

ある人たちは、その寄り添いがどれほど豊かな実りをもたらすかを知りません。

ある人たちは、彼らがないことで、私たちがどれほど貧しくなるかを知りません。

ある人たちは、自分が天からの贈り物であることを知りません。

それは、私たちが伝えなければ決して知ることはないのです。

—— ブルーノ・フェツレーロ



祈りのために（9・25）

教皇フランシスコの言葉に触発された祈り（参照：『Gaudete et exsultate』144）

イエスは弟子たちに、小さなことに心を留めるよう招かれました。

婚宴のぶどう酒が尽きかけている、という小さなこと。

羊が一匹いなくなった、という小さなこと。

やもめがレプトン銅貨を2枚ささげた、という小さなこと。

花婿の到着が遅れても、灯のために油を備えておく、という小さなこと。

弟子たちに「いくつのパンがあるか」を確かめさせた、小さなこと。

そして、夜明けに弟子たちを待ちながら、

炭火をおこし、魚を焼いておられた、その小さなこと。

イエスよ、私は自分にできることをあなたにささげます。

今は大きなことではないかもしれませんが。

けれども、心を込めて行いたいと願っています。

アーメン。